

## 野麦峠

写真上3枚は、朝日新聞10月13日朝刊「be みちのものがたり野麦峠」から。最初は工女が通った旧野麦街道。石仏がひっそりとたたずんでいた＝岐阜県・長野県境付近。

今回たどった「工女の道」は、岐阜県飛騨市から、長野県松本市をへて、製糸工場の煙突が林立していた諏訪湖のほとり岡谷市までを結ぶ約150<sup>km</sup>。10～20代の工女たちは、この行程を3泊4日ないし4泊5日で歩いたとされる。

途中、美女峠などを越えていくが、野麦峠（写真は、政井みねと兄、辰次郎の像）は最大の難所で、冬場には何人もが命を落としたといわれる。

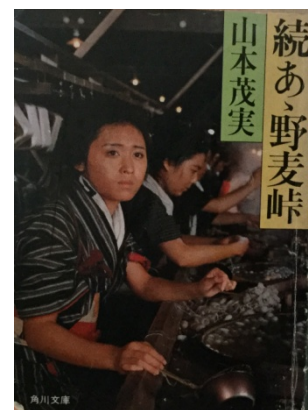
製糸工場が年末の休業に入ると飛騨の工女は、正月を故郷で迎えるため、急いで岡谷をあとにした。ルポ『あゝ野麦峠 ある製糸工女哀史』には、塩尻峠で諏訪湖の方を振り返り、「さようなら」とお辞儀をして下っていったと記されている。同峠近くの塩嶺御野立公園展望台からは岡谷の町など諏訪湖周辺を一望できる。

中学2年から高校1年まで高山、大学は信州松本だったので、野麦峠あたりを遠くに眺めながら暮らしていた。残念ながら、野麦峠には行けなかったが、本や映画で接してきた。大学で戦前日本資本主義を講義したとき、よく野麦峠を話題にした。飛騨の地から、険しい野麦峠を越えて、まだ幼き女性たちが信州諏訪の地まで、なぜ工女として働きに出かけたのか、学生に問いかけた。そして、写真の山本茂実『続あゝ野麦峠』の冒頭を紹介したものだ。

「明治の製糸工場で病女ほど哀れなものはない。健康保険も労働基準法もなく、朝早くから夜9時10時まで働かされて、病気になったら即座にお祓いばこであった。

野麦峠の頂上で、「ああ飛騨が見える」とつぶやきながら息をひきとった、飛騨の工女政井みねもその一人である。

この病女を背板にのせて、峠に背負い上げてきた兄辰次郎の、「みね！ みね！ みね！」と絶望的に泣き叫ぶ声が、野麦の谷々をふるわして響き渡った。明治42年秋のことである。」



(2018年10月16日)